

◀ 書 評 ▶

編集 船川幡夫, 金子義徳

「予 防 接 種」

東京都中央保健所長

長 尾 貞 一

戦後予防接種の種類が増え、大量に行なわれるようになったので、ふだんあまり診療科に関係のない医師まで相当動員されていると思われる。実際に予防接種をやっている医師は、大部分私達と同様に、素人ではないが疫学や細菌学の専門家でもない人達であろう。

殊に最近のように新しい種目が加わったり頻々と変る接種方式など理解するには、今一度どうしても背景の学問までさかのぼる必要があるが、実地家としては必ずしも専門家の領域まで入る必要はない。実地に必要で充分でありさえすれば、できるだけ簡単な指導書の欲しいところである。一般大衆の関心が高まって

きた昨今ではその限界がなかなか微妙である。

新著「予防接種」は一読して、その間の事情に応える極めて実地的な参考書といえる。

予防接種は外見上単純な仕事のようには思われがちであるが、実際に経験してみると気の重い仕事である。

ことに、副作用や不測の事故など考え出すと、接種が終っても半日ぐらいは何んとも憂鬱なものである。だから、予防接種は絶対御免だという医師さえある。しかし、この書に眼を通しておけば、何か自信らしいものが湧いて、その憂鬱をある程度解消する精神安定剤の役割を果たすであろう。

また、昔はあまりなかったことだが、昨今の熱の上った育児ママは、医師をテスト台に立たせるようなことがよくある。忙しい接種の間になり専門的な質問をして、納得がいかなければ根掘り、葉掘り誠に熱心なものである。

こんな場合完全に理解されなくとも嘘をいうわけにはいかない。手短かに、しかも判りやすく説明して、ある程度の満足にあたえなければ医師にたいする不信感にもなる。

このような育児ママの攻勢に対しても、本書は充分な武器となろう。

予防接種が多くの医師の宿命のようになった今日、これに有効な自衛手段を講ずることは、もはや避けられない事態である。

本書は、素人ではないが専門家でもない我々多くの実地家にもっとも適切な機会を提供するものと思われる。

A 5, 217 頁 図34

¥ 1,300, 円 70

医学書院刊